

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 35



野村町 くまがい草

特 交 流 集

『国際交流』

- 愛媛県の国際化
- 明浜発・暮らし経由・世界行き
- 国際交流がやってきた！
- 絵馬から地球(ロシア)が見えて来た

まちづくりにおける商工会の役割……………愛媛県商工会連合会長／平岡利郎…………… 1

⑧ 交 流 ⑧

「国 際 交 流」

愛 媛 県 の 国 際 化……………愛 媛 県 国 際 交 流 課 …………… 2
 明浜発・暮らし経由・世界行き……………明 浜 町／宇都宮茂喜 …………… 4
 国 際 交 流 が や っ て き た ！……………伊 予 三 島 市／河村久仁彦 …………… 6
 絵馬から地球(ロシア)が見えて来た ……………伊 予 市／武智 盛浄 …………… 8

論 談 まちづくりー

生涯学習のまちづくりーその2ー……………愛媛大学教育学部教授／讃岐幸治……………10

レポ ー ト

粹な生活！美しい郷 ～まちづくり先進地県外研修記……………12

えひめ地域づくり研究会議から

地域づくりのペースを求めてー管見スイスを歩いた2週間／見想録Ⅵ……………14

ふれあい広場

リレーでちょっトーク(大洲市・西条市から)……………16

元気印レポート……………18

〈400年前の水軍ロマンを追う〉

〈夢はもみじの里づくり〉

研究員活動を振り返って

出会いとふれあいの二年間 ……………西条市役所／国田敦彦……………22

Information

媛のくにフラッシュ……………23

〈大三島町・肱川町・広田村・中山町・伯方町・吉田町〉

愛媛県から組織改正のお知らせ……………26

ビデオライブラリー新作紹介

特集 “ 交 流 ”
 今号のテーマ
 「 国 際 交 流 」

今日の社会は、高度情報化社会、国際化社会だと言われて久しい。私たちは居ながらにして、国内はもとより、海外の情報などリアルタイムで手に入れることが出来るようになってきた。もちろん、こちらからの情報も送れるわけで、情報の行ったり来たり、つまりは「交流」をしていると言える。

カンボジア情勢やPKF、PKO問題、地球規模の環境問題など関心事も多く、また、日本の伝統的な「わびさび」の文化や武道の精神等に興味を持たれている外国人も多いと聞く。更には、海外留学を希望する者や在県外国人留学生等も、年々増加傾向にあるという。

このような中で、お互いに異質の個性や文化、人間と触れ合うことで刺激しあい、競争しあつて地域の活性化を図るという点から見て、国際交流も一つの重要なキーワードとなってくる。

そこで今回は、《交流》の最終回として、国際交流を特集しました。

表紙の言葉

犬の顔か、エリマキトカゲか、面白い顔に見えるのは、くまがい草。惣川の谷間にひっそりと一面に咲いていたのは初めての出会いでびっくりでした。

熊谷直実が敵武將を打たんとすれば、年は十六・七の我子と同じ、迷がそうとするが戦場の悲しさの平家物語の圧巻。矢を防ぐ武貝の母衣(ほろ)に花をみたてて、白が熊谷、紅が平敦盛であつても草とも呼ばれている。

柳原あや子



くまがい草

まちづくりにおける 商工会の役割

愛媛県商工会連合会

会長 平岡利郎



商工会は、昭和三五年の法制化以来、経理や税務、金融の輪旋、経営の相談などを中心とする経営改善普及事業を柱に、商工業者の指導育成に努めて参りました。

しかし、商工業者とりわけ規模の小さい小売業者においては、人口の減少や購買力の流出、消費者ニーズの多様化、更には大型店の進出などといった様々な環境変化の中で、極めて苦しい経営が続い

ております。

このため商工会では、活動の基盤である地域そのものを活性化しないと、商工業の将来展望は拓けないということで、経営改善普及事業を重要な事業と位置づけながらも、近年地域振興事業への比重が高まりつつあります。

一昨年、中小企業庁が全国の一万人の中小企業の事業主を対象に行った調査によりますと、「商工会に期待するもの」という設問に対して、その五割近くが「地域振興、または、地域活性化」を挙げており、地域振興事業へのシフトを強く求めていることがよく分かります。

本会でも、昨年、商工会関係者を対象にアンケート調査を実施しましたが、国の調査と同様に、まちづくりの中心的機能を果たすべきだという声が大多数を占めており、それに対応できるような組織や運営体制の改革、財政基盤の確立などが大きな課題となっております。

このような中で、通産省・中小

企業庁では、今年度、「商工会及び商工会議所における小規模事業者の支援に関する法律」を制定し、商店街や産業おこしの基盤になる共同店舗や研究開発型の工場、展示場などを商工会自ら建設、運営出来るようにするとともに、そのための補助制度や融資制度などが創設され、商工会活動の領域は大きく広がることになっていきます。

また、商工会が行う地域中小企業を含めた活性化計画の企画立案に対する補助制度の創設や、今後三年間に事務局長を商工会全てに設置することが決定されるなど、画期的な機能の充実強化が実現しました。

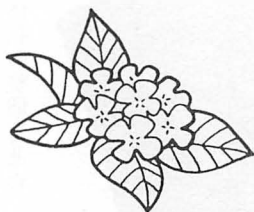
これを機会に、商工会は行政や各種団体との連携を密にしながら、改めて地域の問題点や特色、潜在能力などを再点検し、個性豊かなまちづくりのビジョン策定やその手法を確立していかなければならないと考えております。

特に、今まで推進してきた地元産品を利用した特産品の開発や販路の開拓、観光振興やイベントの

開催による賑わいの創出などの取り組みをさらに強化するとともに、今回新設された事業を積極的に導入しての地域の活性化と雇用の場の拡大に寄与していかなければならないと決意を新たにしているところであります。

まちづくりは、「人づくりに始まり人づくりに終わる」と言われています。商工会は業種業態を超えた多彩な人々の集まりです。今後これらの人々の発想を引出し、まちづくりの推進役として活動することが、商工会に課された大きな使命であるように思います。

愛媛県まちづくり総合センターの一層のご支援ご協力をお願いする次第であります。





愛媛県の国際化

愛媛県国際交流課

国際交流



◆はじめに

二一世紀を目前に控えた今日、科学技術の進歩に伴う交通・通信手段の飛躍的な発達、世界の国々の相互依存関係を深め、それとともに地域における私たちの日常生活も、世界の動きと密接な関わりを持つようになってきました。最早、地域の活動も、世界の諸情勢と深く連動していると言っても決して過言ではなく、地域の活性化にとって、急速に進展する国際化にいかに対応していかにかに的

確に対応していくかということが重要な課題となっています。

◆県の国際化・国際交流

このような状況を踏まえて、愛媛県では、国際化の促進を「生活文化県政」の主要な柱とし

て位置付け、文化・経済などの幅広い分野において多彩な国際交流事業を積極的に展開しています。

昭和六三年八月、本県の国際交流の基本的な展開方策を定めた「愛媛県国際交流基本構想」を策定し、平成二年には、「ふるさと国際化構想」が提案され、現在、この両構想に基づいて、国際化・国際交流の諸施策を展開しています。

主なものとしては、平成元年四月、本県の国際交流の中核的推進組織として、基本財産一五億円で「財団法人愛媛県国際交流協会」を設立し、同年六月には、国際交流の推進拠点として、また、県民と外国人とのふれあいの場として「愛媛県国際交流センター」をオープンいたしました。

平成三年には、国際交流を専門的に取り扱う国際交流課の設置、国際会議等の誘致・支援のための松山コンベンションビューローへの出捐、経済の国際化を促進するための「ジェットロ愛媛貿易情報センター」の開設、松山空港の拡張

整備など、国際化の基盤づくりや推進体制の整備を進めてきました。



特に、平成三年一二月、松山空港が、新ターミナルビルの建設や滑走路の延長など拡張整備されたのを機会に、松山空港を世界への空の玄関として、本県と人的・経済的につながるの深い近隣アジア諸国との国際定期航空路線の開設や友好交流の促進に向けて、チャーター便の増発、友好使節団等の派遣などを行っています。

これまで、知事を団長とする使節団を、シンガポール・韓国へ派

遣し、政府・航空・経済関係機関等を訪問し、定期航空路線開設への協力、観光・経済面での交流促進など本県との友好交流拡大と現地で愛媛のPRに努めて参りました。

また、国際交流センターでは、県民のシンガポール・韓国へのスタディー・ツアーを実施し、現地での交流体験を通してその国の社会や文化などについての理解を深めました。

その他、シンガポールへは、本県の農林水産物とその加工品の海外市場開拓のため、平成四年一月、アンテナショップを開設し、商品の展示・販売を行い、現地での嗜好、商品状況等を調査するとともに、輸出方法等について研究しました。また、平成五年一月には、シンガポール最大のイベントである「チンゲイ・パレード」に新居浜太鼓台を派遣し、一五万人の大観衆の前でその雄姿を披露し、愛媛のPRとイメージアップに努めました。

更に、本年三月二四日には、松



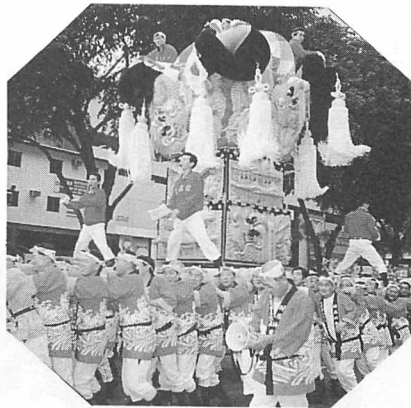
山港地域が国からFAZ（フォース・ゾーン・アクセス促進地域）の第一次指定を受け、事業実施に向けて動きだしました。計画では、保管施設や流通加工施設などの物流高度化基盤施設、貿易・流通業務用オフィ

スなどの輸入支援施設、国際見本市施設などを整備し、国際産業交流を促進し、松山市の地理的特性を踏まえて、四国及び瀬戸内経済圏の輸入拠点として機能させ、本県産業の国際化の促進を図っていくことにしています。

◆まちづくりと国際化

国際化の進展とともに、本県を訪れる外国人、或いは本県に在住する外国人の数が年々増加しています。これらの外国人が生活しやすく、活動しやすいまちづくり、

地域づくりを行っていくことは、世界的に通用するまち、地域づくりにつながっていくということであり、地域の国際化を促進する上で大きな意義が認められます。



地域にとって、国際化の促進がどのような意義をもつのかと言えば、地域住民の意識改革、地域のアイデンティティの確立と新しい地域文化の創造、地域社会の活性化、国際性豊かな人材の育成等が挙げられますが、全く異なった文化・社会に触れることにより、自己及び地域を見つめ直すことには大きな意義があるようです。

二一世紀への確かな潮流であるとともに避けては通れないと言わ

れる国際化を肯定的に受け止め、積極的に対応していくことは、活気のあるまちづくり、地域づくりにとって大きな課題であると思われるます。

◆今後の展望

松山空港の国際空港化、松山港地域のFAZ整備、瀬戸内海大橋（今治～尾道ルート）の全通、第二国土軸構想の推進など、本県の国際化に対する基盤整備は大きく前進しようとしています。

今後も、各方面の協力を得ながら、国際化施策を積極的に展開し、世界に開かれた活力ある愛媛づくり、地域づくりを推進していきたいと考えています。





国際交流

明浜発・暮らし経由・世界行き

流

女



明浜町青年海外派遣協会

事務局長 宇都宮 茂喜

さくらさくら

さくさくら

ちるさくら

もし種田山頭火が明浜を訪れることがあったならば、この句はこの峠（野福）で詠んだことだろう。この町に、町民の総意を結集した「明浜町青年海外派遣協会」が設立され、はや八回目の夏を迎えようとしている。

「世界に通用する人材を育てよう」と息巻いて、派遣生を送り出すこと一七名、この数の重さは延べ九百人という会員数に比例する。そう、会員一人当たり一万円という浄財によって、多くの若者が空を駆けてきたのである。

以前にも紹介したことがあるが、この派遣協会は大きく分けて二本の柱で事業を進めている。それは派遣事業と交流事業である。

国際交流ということばが各地で持てはやされ、珍しさこそ無くなった昨今、私たちは、今一度交流の在り方を考えなければならなと思っています。その問いの一つが花見の会である。

■国際交流花見の会

この行事は六年前に始まった。

当時は外国の人たちと花見でもしよと軽いノリで始めたのが、今や四月三日のお節句の定例行事にまでなっていました。

その後、特に学生のいる家庭を中心に、一泊二日のホームステイを始めた。インド人を迎えた家庭では本場のカレー料理を習い、中国人なら漢字を交えて筆談する。普段着のまま、こ



巻き込んで、花見の会に参加してもらう。三味線の音色と太鼓の鼓動が、今度は外国人に暖かい日本の田舎文化を伝えるのである。

このような中で私たちは、花見の会が日本特有の文化であることを知った。

「コンド、ワタシノマチニキテグダサイ」

…今後の派遣事業において、大きな友情の輪が広がっていくことを、この会に期待している。

■女性がより素敵になる海外体感ツアー

最近では、誰もが気軽に海外へ出て行ける時代になった。派遣生の一人旅でも、海外で驚くほどの数の日本人に出会ったという。

しかし、それはほと

んな具合に短期間で民族の違いを感じてもらおうというのがねらいである。

また、地区の人たちをどんどん

スがないのが現実であろう。そんな中で、異文化との交流を目的に、「女性がより素敵になる海外体感

ツアー」を昨年六月に実施した。

テールマナーから簡単な日常会話まで、半年にも亘る研修を積んだ二〇人の女性（平均年齢四四歳）は、嬉々として、また、淡々としてヨーロッパへ出掛けたのであった。まるで宇和島へ買物にでも出掛けるように…。

ベルギーでは、地元の女性の方と料理教室で交流をしたり、また小学校の授業参観交流やパリの町並み散策など、決して観光旅行ではなく、たった一〇日間ではあったが、彼女たちは一年分くらいの思い出を詰め込んで帰ってきた。

言葉や習慣などの壁を乗り越えて、ヨーロッパの人たちの生活を体感してきた彼女たち…。テレビ



風景の会見花

や雑誌で見る世界ではなく、自分の目や足で感じた外国。そして交流。

これから何が生まれてくか、とても愉しみである。

一方、お母さんの居ない一〇日間は、お父さんをはじめ、子供たちにとっても意義ある一〇日間であった

ようだ。ある家では父親が娘のパンツを洗ったり、髪を三つ編みにしたりと…、通常では出来ないこともあったとか。これもツアーの生んだ副産物だったのだろうか。



女性がより素敵になる海外体感ツアー料理教室 ブルージュにて

或る人がこんなことを話してくれた。「おかげでおもしろかったで。明浜に住んどって良かったわい。もっとおもしろい町にせんといけんな。私らで良かったら何でもするけん！」

交流は一つの自分探しの旅でもある。

さて、肝心の派遣生一七名は、アメリカ・スペイン・オーストラリア・ドイツ・ブラジル・フランス・中国等々、それぞれ行く先は違っても、共に同じものを見てきたようだ。それは、どこの国もこの町と変わらない暮らしぶりであった。観光ガイドには載ることのない庶民の暮らしであった。

それぞれが一人旅の中で、人との交流の中で、それを見つけてきたようだ。

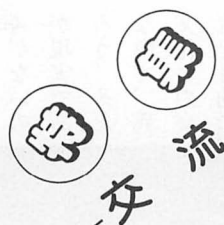
明浜は俗にいう僻地である。背後の急峻な山々に迫り出され、海に行く手を阻まれるかのようなわずかな平地に、私たちの暮らしがある。だが、海は世界に通じている。かつて昭和の初めに、この港から新天地ブラジルへと夢を馳せ

た人たちがいた。これが龍馬であれば、ここから大海へと船を漕ぎ出したことであろうが、私たちは空を見る。彼の地で見た青い空はこの浜の空と何一つ変わらない。それは肌の色や言葉の違いはあっても、人間として、同じ暮らしを営んでいることには変わりがないことに通じる気がする。

彼女たち二〇人がこの交流の中で、外国で臭ぎとった暮らし、生活の匂いもそうであったかもしれない。五感でそれを感じとること…それが真の国際交流ではないだろうか。

国際交流とは民族文化のぶつかり合い。互いに文化の違いを認め合い、西と東の文化を調和させ、融合させたシルクロードのように、私たちの活動が互いの暮らしを結び合う架け橋になりたいと願っている。





国際交流がやってきた!

国際交流

伊予三島市役所
河村 久仁彦



○柔道使節団アメリカを行く!

「イッポーン」。

英語訛りの主審の声が、道場
いっばいに大きく響く。見事な払
い腰が決まり、宙を舞い、一回転
して畳に落ちた金髪の選手自身も
呆れたように拍手を送る。ここは
ワシントンDC、つまり世界を動
かすアメリカ合衆国の首都である。
去年の夏、伊予三島市が、日本
柔道連盟の公認使節団として米国
の東海岸に派遣したメンバーは、

日本のお家芸「柔道」を通じて、
文字通り肌と肌の触れ合いで国際
交流を実践した。一行は、市長を
団長に、選手一三名・役員四名の
総勢一七名。中学生・高校生とし
て一般、内三名は女子高校生とい
う構成である。

ボストン、DC、NYでの交流
試合は、親善とはいえ真剣そのも
の。特に、米国最大の規模を誇る
クラブとの試合では、対戦相手の
中には全米チャンピオンやソウル
オリンピックの銅メダリストなど
が居り、顔ぶれは豪華そのもの。
試合の結果は別にして、汗を流し
た後のパーティーは言葉の壁など
全然感じさせなかった。ホーム
パーティーと呼ばれるという嬉し
いハプニングも。肌の色や言葉、
宗教や国籍を越えた付き合いがこ
こにはあった。

○キャロリン・ホッジです!

ついにやって来ました。一九九
二年四月一日は、伊予三島市の歴
史に残る日となった。友好交流を
目指しているDCから、AETつ
まり英語指導助手として、キャロ

リン・ホッジが赴任。マスコミで
は国際化、国際交流が大流行の昨
今だが、四万人足らずの伊予三島
市には外国人はやっぱり珍しい。
観光客としての外国人は知ってい
ても、日常的な生活の中での外国
人との接触は未知の世界である。
彼女のインパクトは凄かった。

可笑しい時には笑うし、結構茶
目っ気もあるし、何と言っても、
酒を飲めば酔っぱらうのだ。同じ
人間。恐る恐る使ってみた英語(正
確には英語のような言語)も何と
か通じる。市民の国際化のため
には、市職員の国際化は不可欠、そ
して担当者のそれは言うに及ばず。
彼女の存在そのものが、国際交流、



○善意通訳者、大集合！

WANTED! GOOD | W



○イーファ誕生！

イーファとは、伊予三島市国際

○サンノゼ大学柔道チーム来市―

カリフォルニア州立サンノゼ大

ると思います。





絵馬から地球(ロシア) が見えて来た

伊予市 武智盛浄

国際交流



松山市内から国道五六号線を南へ車で二〇分程走ると、照葉樹林に覆われた丘陵地、伊豫岡八幡神社古墳群(県指定史跡)が見えてくる。清和天皇の御代、八五九年(貞観元年)八月、筑紫の宇佐八幡宮を山城の男山に御勧請する途中で、郡中の海浜に御泊船の時、靈験があったことからこの地に社殿を建立し、御祈願所に定められたと伝えられている。石清水八幡宮の古文書によると、社領が非常に広汎で、大洲領主加藤家では崇敬の念厚く、多数の絵馬が奉納されている由緒ある神社である。

今から六年前の二月のある夕べ、伊予市で会合があり、私の高

(一番左が武智さん)

校時代の恩師島津豊幸先生にご出席いただいた。五七段の石段を登り、夕闇迫る拝殿に佇み、暫く絵馬を観ていた先生が急に「武智君、これはロシア人ではないかね」と声を掛けられた。ロシア兵看護、征露凱旋記念絵馬との出会いであった。

明治三十九年五月、日露戦争の戦いから無事帰還した二三名の氏子の青年たちが、感謝の念を込めて奉納したものである。殺戮(ころりく)の場面でなく、負傷したロシア兵介護の場面を描いた理由は一体何なのか。これは戦争の無意味さ、平和への願いを我々に訴えているのではないのか。興味を持った私は、この絵の作者や奉納者の子孫を訪ねる事により、当時の様子が分るのではないかと思ひ、調べることにした。

『松山捕虜収容所(才神時雄著)』によると、日露戦争中、当時の郡中町(現、伊予市)彩浜館でロシア将校捕虜を歓待した話が載っている。早速、県立図書館に足を運び、当時の海南新聞(現愛媛新聞)を閲覧した。幾日か通って、明治

三十七年十一月十九日、『俘虜の日本観』(軍事通信員タゲーエフ手記)の記事を発見した。苦勞の甲斐あり、天にも昇る思いがした。ここで一部を要約紹介する。

「日本政府では吾等、自由の範圍を尚一層拡げる計画があるようで、私が大佐と会話を終えると、大佐は大いに喜ぶべき通知を伝えられた。狭軌鉄道会社社長の井上要氏が、今回俘虜将校に日本人の生活状態研究の便宜を計る為め、松山市近郷に数回の旅行を試み、吾等俘虜を慰めたいとのことである。其旅行の順序は、第一回は海岸にある郡中と言う町に吾等を案内し、そこで日本遊戯のひとつである昔の矢の射方を見せ、その町で出来る土地の産物を陳列してみせ、その他、やはり日本人生活上非常に有益な何回かの次の旅行も計画せられているということであった」

人生は出会いであり、出会いにはドラマを生む。調査が進まず困っていたところ、ロシア兵ならぬロシア人が当神社にやって来た。平

成二年一二月、在大阪ソ連総領事
ワレンチン・アレクセイエフ氏他
四名は、松山市のロシア人墓地を

墓参した足で絵馬を観に来られた
とのことであった。私の拙い説
明の後、社務所で用意した甘酒を
飲みながら、彼はこう語った。「あ
の絵馬を観ると、日露の人道的・
友好的な場面があることが初めて
分った。両国の間に悲しい事実も
あったが、これは戦争だ。戦争が
あると同時に、いくら苦しみがあ
っても互いに助け合う、人間ら
しい、深い深い人道的な気持ちに
満ちた絵馬である。両国は隣国で

あり、互いの努力により今後も友
好を深めて行こう」と、深く感動
された様子であった。



年が改った平成三年二月、初め
て総領事館を訪問した。友好的な
話し合いの中で、ソ連から感謝の
意を込めて、カラマツがプレゼン
トされることになった。伊予市に
帰り、市民の有志の方々と何回も
話し合った結果、伊予市歴史文化
の会会長森岡正雄氏を会長に「日
ソ親善植樹記念式実行委員会」が
結成された。同年八月一九日のソ
連のクーデター未遂事件を経て、
ソ連崩壊一週間前の二月一五日、
幾多の困難を乗り越え、ソ連総領
事夫妻をお迎えし、日本で最後の
歴史的な日ソ友好親善記念行事を
市民協力のもとに成功させた。総
領事は、激動のソ連について「今、
我々の国は複雑で難しい時期を迎
えている。しかし、どんな結末を
迎えようとも日本国民に対し敬意
をもって親善を深めたい気持は変
わらない。隣国同士、この地球を
一緒に守って行こう」と言及され
た。



歴史の流れは速いもので、友好
の架け橋カラマツが八幡神社に見
事芽を出した平成四年五月のこと、
ロシア連邦大阪総領事となられた
ワレンチン・アレクセイエフ氏よ
り国名披露の招待を受け出席する
ことになった。その席で「これか
らの主役は、少年たちです。ロシ
アのノボシビルスク市少年野球
チーム親善交流に共に努力しよう
ではないか」との話があった。
後日、同チームを派遣したい旨の
メッセージが伊予市長あてに届き、
市民協力のもと「伊予市・ノボシ
ビルスク市親善交流会実行委員
会」が結成された。

エリツィン大統領の訪日中止が
決定した一週間後の九月一九日よ
り三日間、少年野球チーム「サバ

リョーク」の一四名が伊予市に
やって来た。言葉の壁を乗り越え
て、ホームステイや、小中学校の
訪問等、様々な交流の場をもった。
テレビ、新聞等マスコミにも大々
的に取り上げてもらったので記
憶の方も多いのではないかと思う。
地域の活性化、まちづくりの問
題を考えるに当って、何か良い解
決策があるだろうか。現代は、国
際化・高齢化社会・環境問題を避
けては通れない。国際交流につい
て言えば、次世代の少年少女たち
に思いを託し、我々大人の務めと
して、交流の場を出来るだけ多く
与えてやってはどうだろう。地域
の歴史、文化を、学習することに
よって、真の日露友好国際交流を
図っていききたいものである。

伊豫岡に奉納されし日露絵馬
今甦える百年を経し



生涯学習のまちづくり

— その2 —

愛媛大学教育学部教授

讃岐 幸治

一、まちづくりは人づくりから

いかに人口の流出をくい止めるか、各地方は、これを至上命令として雇用の拡大のために工業誘致をしたり、特産品開発センターを造ったり、住民の生活安定を図るために生活環境の整備などに取り組んできた。しかし、どんなに物的な条件を整備しても、住民の側に創意と自発性に基づく活動がなされなければ、まちの活性化は進行しなかったし、その成果を挙げるこ

とにも限界があった。

いつまでも「過疎を嘆き、国や県にお涙ちょうだい式にねだっている」状態では地域の活性化は本物になりえなかったし、また「もう俺たちのまちは駄目だ」という心の過疎が充満しているところでは物的な条件を如何に整備しても、その成果は挙がりようがなかったのである。こうした苦い経験から、活力のあるまちづくりには、物的な条件整備も必要だが、それ以上に「自分たちのまちは自分たち

の手でつくっていく」という独立自尊の精神、「気概こそ大事だ。何よりも住民の生き方や意識の変革こそが基本だ。人づくりをしないことには、まちづくりは出来ない」という考えが強まってきた。

例えば、「一村一品運動」の提唱、推進者である平松守彦大分県知事は、次のように言っている。「地域社会が自ら立ち上がるには、持てる力、活力を燃焼させなければならない。この活力に点火させるには、まず地域リーダーの掘り起こしと、そのリーダーの交流研修から始めなければならない。優れた物産を作りうるのは優れた人間だけである。一村一品の「品」は人品の「品」であり、活力を引き出す人づくりこそが、最も大事なことである」

こうした意見に代表されるよ

うに、産業を振興するにしてもバイタリティに富んだ能力のある後継者を育成しないことにはどうしようもないし、郷土を愛し、誇りを持って我がまちをより良くしていくこうとする住民がいないことには地域の活性化は進まない。住民の主體的エネルギーを活性化する人づくり、つまりは生涯学習の振興こそが、まちづくりの基本であると言う認識が広がってきたのである。

二、生涯学習の振興は

まちづくりから

他方、教育の在り方も問われ始めてきた。これまでのように画一的な没個性的な教育でなく、地方や地域を十分に見つめ、住民の学習や学校教育の内容にしても地域との関連で捕らえる必要があるのではないかと言う考

え方が強まってきたのである。

新堀通也氏の言うように、地方の時代にあつては、「それぞれの地方の教育はその地方の個性や独自性を重視し、またそれを育てなくてはならず、地元から指示され住民の誇りになるものでなければならぬ。それによつてこそ中央に対抗しうる地方が生まれる。地方はまた固有な条件や問題を抱えている。地の利を生かした教育、地の利を生かしうる人材や産業を育てる教育、地域の問題を解決する教育が推進されなければならぬ」こうした教育が要請されてきた。

では、それぞれの地方において、こうした教育が行われるようにするためには、どうすればいいのか。それぞれのまちにある資源を活用して、「だれでも、いつでも、どこでも」学習出来るようなシステムをまちの中に作っていく以外にない。

地域には多くの資源がある。学校をはじめとして、公民館、図書館、あるいは役場、農協、さらには保健所や警察署などの公的な機関もあれば、民間の企業もあるし、人材もいる。自然もあれば伝統文化もある。

こうした資源を教育資源として学習に役立てるように再編成して、学校教育だけでなく教育全体のシステム、さらには教育を含む社会全体の文化水準を向上させ、まちの文化性や教育的雰囲気高め、さらには、学習しやすいように快適な施設や道路、公園なども整備していく。そして、「だれでも、いつでも、どこでも」学習が容易にかつ快適にできるように、そんなまちづくりが必要になってきたのである。

さらに「環境が人をつくる」という言葉があるが、生涯学習の振興を図ろうとしても、そのまちに反教育的、非教育的な雰

囲気が充満し、自然も住民の心も荒廃しているなら、住民の感性や人間性の高まりようは、高が知れたものだろう。住民が健康で文化的な生活を営むことの出来る環境づくりがなされ、我がまちに誇りと自信をもち、相互に励まし合い、ロマンを追求めて行くような雰囲気のみならず、住民の学習への意欲も高まろうし、学習活動も盛んになるといえる。生涯学習の振興を図ろうとすれば、まちづくりを前提にせざるをえない。個性豊かなまちづくりがなされているところでこそ、生涯学習の振興もなされるというものである。

以上からみても分るように、両者は密接に絡み合っている。生涯学習の振興はまちづくりを前提条件とし、また、まちづくりを生生涯学習の振興はねらっているといえる。したがって、最近よく「まちづくりのための生

涯学習か、それとも生涯学習のためのまちづくりか」と言う論議がなされるが、どちらが手段か目的かではなく、生涯学習の振興とまちづくりとは相互依存的、相互補完的な関係にあるというのが今日の新たな特徴だといえる。

「粋な生活!

美しい郷!

～まちづくり先進地
県外研修記～

研究員

尾崎 弘典

◆プロローグ

今回私たちは、五月二四日から二七日にかけて、人に対して、美しい景観整備を核にまちづくりを進める、滋賀県長浜市、甲良町、高月町雨森地区、近江八幡市、兵庫県神戸市、岡山県美星町を訪ねた。

その中から、歴史ある風景を守り、高めながら、地域に住むそれぞれの人の輪を大切にしつつ、まちづくりを進めている高月町雨森地区、また、花を生かした都市景観の創造を目指す神戸市公園緑化



協会を中心として、神戸市のまちづくりを、私見・所感を交えながら紹介します。

◆雨森の風景・・・

滋賀県高月町の地区の一つに雨森地区がある。人口五三〇人、戸数は一一五戸という小さな集落には、美しい水が流れる堀があり、コイが泳いでいる。堀の側には手作りの水車が並んでいたり、竹のプランターや鉢花が彩りを添えている。

また、神社のイチヨウヤクスの大木が雨森の古人の思いを語っているような、心安らぐ静かな風景がある。

水と緑と花たちが、訪れた人々に心地よい印象を与えているようだ。

〈元気の源は、

「区報あめのもり」〉

雨森地区は、建設省の「第一回手づくり郷土賞」をはじめ、滋賀県の「景観功労賞」、「わがまちを美しくコンクール」金賞、農水省・建設省提唱の第1回花のまちづくりコンクール」最優秀賞などに選ばれているほか、県の風景条例「近

隣景観形成協定」締結の認定第一号となっている。

その理由の一つには、花によるまちづくりが挙げられるだろう

花のまちづくりを例にとっても誰に言われたものでもなく、ごく

自然の行為として、各家庭の前を流れる堀割に、自分たちで育てた花を置いている。隣も、そのまた

隣にも花が飾られ、集落全体が美しい花による町並みになっている。

その美しい雨森を訪れる人は、年間三万人になるそうである。その人たちに褒められ、羨まれながら、更にまちへの愛着、誇り、活動への自信を高めているようだ。

また、みんなの気持ちがあるさ

とに向いているのも、「区報あめのもり」を通して、共通の話題・意識が芽生えるような仕掛けが行われてきたからだと思う。

「区報は、住んでる人が登場する場として、必要不可欠の存在」と高月町役場建設課長の平井茂彦氏は言われる。

〈雨森芳洲と共に・・・〉

どのまち・むらにも、地域が成



立する過程で培われてきた独自の遺産がある。

今から三三三年前に、この地で生まれた雨森芳洲を、過日、訪日された盧泰愚大統領が、宮中晩餐会のあいさつで、「誠意と信義の外交家」として称されたそうである。

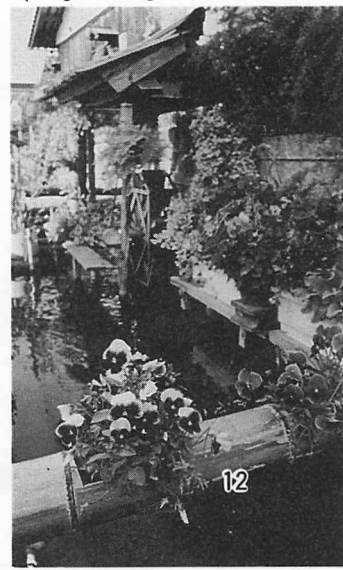
その宝を伝承し、活用していくため、芳洲顕彰館「芳洲庵」を建設している。

また、韓国の青少年との交流も盛んに行われており、ホームステイなどで草の根外交を行っている。

雨森の人々は、ふるさとを愛すると共に、自発的な意志で無理のない活動をしている。おそらく、

優しさや思いやりなどの情、公德心などを自然に身に付けているのだろう。

同時に、人として、どんな生き



方をしていくのか、何を大切に
して、どう行動していくのかを知っ
ている。まちづくりの根っここの部
分を垣間見たような気がした。

◆「花のまち神戸」

神戸市は、地域の中央部に六甲
山をはじめとする山々を抱き、市
街地は瀬戸内海に面し、西・北部
には田園地帯が広がる、都市と農
村が共生する自然に恵まれた、面
積約五四㎢、人口約一四八万人
の都市である。

昭和四六年、緑豊かな公園都市
を目指した「グリーンコウベ作戦」
の実施をスタートとして、昭和六
〇年に開催された第三回全国都市
緑化フェアやユニバーシアード神
戸大会の開催など、市政の最重要
施策の一つとして、花による美し
い、安らぎを感じる都市景観の創
造に取り組んでいる。

〈事業内容〉

(1)市民の参加

- ・ 道路や公園の花壇の管理（市
民花壇）
- ・ 道路等における婦人団体のプ
ランターの管理（ハミング広

場）

・ ベランダ（マンション等）の
緑化

(2)民間活力の導入

- ・ スポンサーによる駅前広場等
の花壇管理（ふれあい花壇）

(3)啓発活動

- ・ 区の花の公募選定（決定済）
- ・ 花の名所テレフォンサービス
- ・ 「花のフェスタ」の開催

(4)公共施設等の緑化

- ・ 市庁舎や学校等
- ・ 花の咲く街路樹の導入（花木
のまち）
- ・ 歩道の立体的飾花（花のプロ
ムナード）

以上、(財)神戸市公園緑化協会で
進められている事業の内容である。
事業を進める上で、当初は花壇
の数を増やすことを基本としてい
たが、これからは、周りの風景を
引き立たせるような花壇の演出を
どうするかということを大切にし
ていきたいと考えているそうであ
る。

花による美しい景観創造につい
ての行政の投資や花壇数など、規

模は異なるが、美しい町並みの創
出やふるさとを愛する人材を育て
るといったことについては、その
狙いとするところは、行政規模に
よる差はないと思われる。

町並みに花を添えることにより、
美しい景観を形成しようとする神
戸市のまちづくりの行政手法は魅
力的である。

例えば、「布引ハーブ園」や「須
磨離宮公園」、農業ルネッサンスを
目的として建設された「フルーツ
・フラワーパーク」などの施設を
見ても分かる。

施設を建設する際には「神戸と
いうまちのイメージ」を考慮して
作られた都市景観形成マニュアル
が行政内部で見事なまでに意識統
一され、確かな運用が行われてい
る。

従って、行政の各セクションに
おいても、神戸という街の景観に
対しては、組織の一員としての認
識に相違がないのである。

こうしたことは、地域住民から



見れば、普通に考えると当然のこ
とであり、人それぞれ違うのが人
間だとは、公共機関として言えな
いのではないかと考えさせられた。

誰がしようと、組織として統一
されたまちづくりの基本コンセプ
トの基に行うこと、そしてそれを
具体的に表したコンセプトが、今、
まちづくりに求められている。こ
のような観点からも、神戸市の行
政システムは素晴らしいと思った。

◆最後に・・・

この研修を振り返って、まちづ
くりと自分づくりは、同じレール
の上にあるという思いを強くした。
『一人はみんな（全て）のために、
みんな（全て）は一人のために』
というような社会を、まちづくり
運動の中で作るためにも、自分
は何か出来て、何をしたいのかを
探り、自分にとって心地よいと
まちづくりを見つけていきたいと



見管 スイスを歩いた2週間／見想録(VI)

「大国にならない決心の国」 宮本俊一

◇野辺に／マシーングンの平和

「びっくりした！ あたりに人影のない道端に駐車した空車を覗いたら…、何と！ マシーングンが無造作に座席に置かれとる…」
Aさんが、とんでもない物を見た驚きを誰かれとなく語る…。

私は見ていないので…いつだったか覚えてないが、多分ミューレン最後の日と思う。私にはあの日は、とても愉快な一日だった。

早朝、ロープウェイでシルトホルンへ。展望レストランから…朝日と雲影で刻一刻と変化するアイガー、メンヒ、ユングフラウ等を満喫。下りはミューレンでロープウェイを乗り継ぎ、八〇〇m余りも急勾配を下った谷底の駅に、思いもかけず墨太に書かれた…日本人の『アイガー北壁登頂記』を一瞥し、何とも言えない感動に浸る。そのせいか、続いて行った三〇〇mはあろうかと思う断崖を落ち

る、素朴だが…綺麗な大滝では、

踏めば崩れる急勾配の砂れきの山を這い登るうち、胸突き八丁に挑むボーイスカウトの気分になり、滝壺の虹を見た三人の一人となりご満悦。

続いて、この村からラウターブルネンを通り、インターラーケンへ流れるリュツシュイネ川の「水制工」を見ながら…平坦でのどかな野辺の道を上流の村まで三、四kmを往復ハイキング。私はグループから遅れ、独りスカウト・ソングを口ずさみつつ…すれ違うハイカーに明るく「ハロー」と挨拶。まるで、かつての日本の春の野辺を行く少年になっていた感…。

そのうらかな野辺にマシーングンだ。もし私が見たのなら、その時の気分のままに大騒ぎだったろう。やああって…山間の僻村とは言え、銃を野放図に放置して何の危険も感じない…市民感覚に、

それが育った平和なスイスの社会秩序を想い…、その感慨が続く。

◇市民は／銃に伝統の特殊感情

後日、チューリッヒ近郊の『近

自然河川工法』を見学した。その道すがら「あれは射撃場だ…」と指さされたが、私にはどこが射撃場か…畑も牧場も一帯に見える。

「あれでは、野良仕事に危ないのでは…」と問うと、「的外を外すスイス兵はいない」の答。成程、建国の伝説ウイリアム・テルの末裔らしい…と、妙な納得をした。

知られる通り、スイスの永世中立は、国民皆兵制の武装中立だ。

職業軍人は殆どいない。將軍は七二人だか、その三分の一が生業を持ち軍人ではない。訓練が必要なパイロットが一五〇人。国境警備と武器保守要員二、〇〇〇人。兵学校や演習の教員一、五〇〇人。ざっとこれが職業軍人だという…。

だから、日頃は一般市民である民兵が軍の中核で、非常時には、二四時間以内に三〇万、四八時間以内に六〇万の民兵を動員するそれで、総人口の一〇％に当る軍隊

があることになる。この市民であるとともに軍人という民兵制が、銃・弾薬・軍服等を家で保管。いざ！の時は、直ちに出勤の体制。

普通の国では、市民が武器を持つのは危険なことで、禁止が制限されるが、スイスで問題にされないのは、中世以降『射撃が国技』に定着していることと、『傭兵供給国』という歴史的な伝統から、銃に特殊な感情が育っている上、独特の民主制が根付き、政治が安定しているため…と言われる。

「スイス人は、中立は武器なくして守れないと固く信じている。これは一三世紀、ウーリ、シュビーツ、ウンターワルデン三州が、ハプスブルク家に対抗して自主独立を宣言して以来、スイス人がヨーロッパの谷間で列強の栄枯盛衰を目の当たりにしながら、深く心に刻みこんできた信念なのだ…」と吉田庸彦さんが述べられているが、私もそうだろうと思う。

◇傭兵制／穀物輸入へ血の輸出

誓約同盟がハプスブルク家に勝利し、一四七六―七年の戦いで、

ブルゴーニュ公国を解体して西部の圧力を除き、一四九九年シュヴァーベン戦争で皇帝軍を破り、スイスはヨーロッパの国際政治で重要な位置を獲得する。

わけても一四九四年、フランス国王シャルル八世のイタリア政略で、破竹の進撃をした中核がスイスの傭兵軍だったことは、その強兵ぶりをヨーロッパ諸国に轟かせた。つまり、敵より少ない兵力で勝利を重ねるスイスの傭兵を、戦のたびに各国が求め、それが勝敗を決するようになったからだ。

森田安一さんは、「スイス傭兵の起源は遙かに遡るが、この時代の特徴は傭兵の特許システム化だとされる。スイスは貧しい国土に比し人口過剰で苦しんでいたが、一五世紀以降の牧畜の発展で耕地が減り、穀物不足を深刻にした。この解決は輸入だが、輸入資金に加え、戦乱絶えない時代なので、輸出保証と交易路の確保が問題。その一石二鳥策が『傭兵特許システム』だった」と説かれる。

それは誓約同盟各邦政府が、外

国との政府間協定で傭兵徴募を特許し、その交換で穀物輸入の保証と、傭兵供給保証の年金を受けて穀物代金に回す、いわば人間資源を利用し、血液を売って食糧を確保するシステムを創ったワケ。

勿論、こうした『血液輸出』への抗議は、スイス各邦で次第に高まるが、その実現はスイスが他の輸出品を創造し、子孫を国内で養う平和産業を創ってからである。

◇食糧へ／魅惑の膨張策と瓦解

ともあれ、シャルル八世のイタリア占領は、翌年イタリア側の反撃で撤退するが、次のルイーニ二世は一四九九年、誓約同盟と一〇年の同盟を結び、その傭兵を獲得してイタリアに進撃し、ミラーノを奪う。翌一五〇〇年、ミラーノ側もスイスの傭兵を得て反撃するが失敗する。この戦で傭兵制は、外国のためスイス兵同士が国外で争う状況に遭うが、問題視されなかった。

しかも誓約同盟はこれに乘じ、アルプスの南側の地域ベリンツォーナを獲得するが、これがス

イスをして、単なる傭兵提供者ではなく、国家的な膨張政策を進める転機となる。それはアルプスの南、特にミラーノが強国に支配されることを拒む姿勢となり、フランスとの同盟期限が切れた翌一五〇一年、教皇と秘密傭兵契約を結び、フランスをイタリアから追いつす『神聖同盟』に加わり、あわよくば、自ら北イタリアの支配権を確立しようとする政略を進める。

そして一五二二年、誓約同盟はバヴィーア戦役でフランス軍を破り、バヴィーアとミラーノを占領して、現在のルガーノとロカルノ地域を獲得し、ミラーノを保護国とした。ここにスイスは北イタリアの穀倉地帯を押え、穀物輸入路を確保して、長年の念願であった穀物不足の解消を達成した…。

ところが一五一三年、フランスがその巻返しを図り、ノヴァーラの戦で再度スイス軍に破れるが、スイス国内では、この戦いを契機に、膨張政策反対の一揆が各地に起る等…内部の不統一が生れる。

そんな時、ルイーニ二世の後を継

いだフランソワ一世に、一五一五年、ノヴァーラの屈辱を晴らす戦いを挑まれ、国内不統一の虚を突かれたスイス軍は、マリニャーノの戦いで決定的に敗北。ミラーノは再度フランス領となり、スイス膨張策は瓦解してしまふ。

◇自覚／棲み分け原理への回帰

この後、「自分の力を過信しかけていた…スイスは、この敗戦を教訓に、これ以後、武力を使って自分の勢力を拡張しようとする…『大国になることを考えない国』となった」と言われている。

しかし私には、「長い歴史の一瞬に、スイスの人たちがその生存権をかける…食糧確保策として、列強の覇権拡大策に魅せられ渦中に墜ちるが、本能に近い感覚で本質の違いを臭ぎ分け…、この敗戦を契機に、伝来の『棲み分け原理』へ自覚的な回帰を決心したのだ」と想える。（この稿は、森田安一著『スイス』・吉田庸彦著『不思議の国スイス』等が参考）

小学校教育未だ校門を出でず



大洲市 常磐井 忠伽

万緑に染まりそうな山の麓に、

校名と男女の氏名を記した自転車
が並ぶようになって幾日か過ぎた。

他人事ながら、彼らの人生の楽し
い青春の思い出となることを祈っ
ていた。四―五日してそこを通っ
たところ、ジュースの空缶、紙袋

が散乱。彼らがやって来るのを見
計らって、私は次のように言った。

「犬や猫は後仕末しないねえ。

人間は知恵や手が働く。大きな違
いでしょ。これを活用して、良
い社会を創るのが文化なのよ。暗
くならないうちにお帰りなさい
ね」

それ以来ゴミは無くなった。私
は道路や広場、特に公共の場所に
散乱しているゴミを見ると、現代
日本の恥部を見せつけられるよう
で、もう何十年もゴミ拾いを続け
ている。

今朝も、出勤途中らしい男性が

竹林に数個のゴミ袋を投げ捨てて
行った。ゴミ類は、とかく草むら
や人通りの少ない所に捨てたがる。

多少の気後れは感じるのであろう
が、私は次のような憶測をする。

母の胎内にいた頃の暗くて安全な
そして万全に保護されていた時代
への甘え、郷愁心理とでもいうも
のが存在するのではなからうか。

ゴミの処理もできない者は自立で
きていない証明であろう。大洲方
面の方言では、これを『尻拭かず』
という。

私の知り合いの若い母親は、子
供のおもちゃの片付け用に、寝袋
のような袋に長いチャックをつけ
て、その中に片付けさせている。

さあ、どこかに行こうという時は、
このおもちゃ袋を車に積むのであ
る。幼子がおもちゃを入れている
様子を見てみると、大きい物を先
に入れ、ゴチャゴチャした小物は、

母親手製の布袋に入れてか
ら、おもちゃ袋の空いている
所にちよこんと入れている。そ

の時の満足気な表情のかわいらし
いやら美しいやら……。心から母
親に讃意を表したい。

さらには、このお母さんの母親
の教育がまたふるっていた。子育
てに次の三つの方針を立てていた。

- ・返事をはっきりすること
- ・笑顔を絶やさないこと
- ・お金を生かして使うこと

ある日、四年生と二年生の姉妹
が、十円のお金を無駄にしたとい
うので、母親は、駅に連れて行き
「ここから大洲駅までの汽車賃は
十円よ。十円分歩いてごらん」と
言った。姉妹は早春の雨の中を
ショボショボと歩いて行ったとい
う。

近頃は、スーパーでは全く無言
で買物ができるといふ。返事は相
手との間の存在確認だけでなく、
内容を確実に伝え得たかを知るう
えで大事なことである。小学校新
入生は、一番はじめに返事の練習
をする。しかし成長するにした

がって返事も風化状態になる。

また最近では、飽食の時代といわ
れ、食べ物を放置したまま腐らせ
たりすることが多い。カビや空気、
熱などおよそ人間生活に必要なこ
とは小学校で習っているのに、「小
学校教育未だ校門を出でず」の感
がある。

私は人様から話を聴くことが大
好きで、いや、知らないことが多
過ぎるので教えを乞うのであるが、
一度も嫌な顔をされたことがない。
「学ぶ」の語源は「真似る」とか、
今、七十歳を過ぎたけれど、生涯
学習でありたいと願っている。

今回は、長年奉仕活動が続けて
いる、大洲市の鎌田リヨ子様にお
願いします。



西条の先覚三医人

西条市 篠原 秀幸

レリーフ像

四季折々に美しい石鎚山、清冽な加茂川の流れ、地下水が自噴するなど自然に恵まれ、また、光と音と色と熱気あふれる「西条祭り」に象徴される伝統と歴史のある西条から、三人の先覚医人が生まれた。

大樹に成長している。

岡田先生は「聴力保護の日」を提案、これが現在の三月三日の「耳の日」となる。また、日本が学会や聖路加国際病院、昭和医大を創設された。

東大耳鼻咽喉学会を初めて主宰された岡田和一郎先生。東京駅頭凶弾に倒れた浜口雄幸首相や夏目漱石の主治医をされ、医学にレントゲンなど物理療法を取り入れた東京大学物療内科初代教授真鍋嘉一郎先生。医学における栄養学の重要性を説き国立栄養研究所を創られた佐伯矩先生である。西条市医師会館前に、医師会創立三〇周年を記念して、伊藤五百亀先生（西条市出身・日展審査員で昨年亡くなられた。）によるレリーフ像がある。世は平成となり

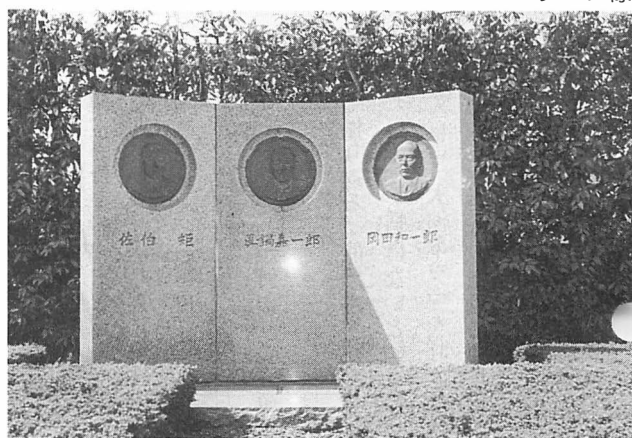
佐伯先生はアメリカ留学し、当時ニューヨークの高峰讓二博士（ジースターゼ発見）に懇望されたが断わり帰国、日本医学に栄養学を導入された。当時用いられた「營養」を現在の「栄養」という言葉に改められた。また学校給食を初めて実験された。現在の学校給食のはしりである。

「人のことを一たびするとそこは吾これを十たびせむ、人の十たびするところは、吾これを百たびせむとは、一生を通じて多くの守った箴言である」これは清貧のなか東大教授になられた真鍋嘉一郎先生の言葉である。西条高校では、卒業式で特に数学に秀でた学生に、「金

子賞」が贈られる。権威ある賞である。郷土史家塩出光雅先生によると、この金子賞の由来は、「金子先生と真鍋先生は高等小学校の師弟として出会い、金子先生は、お母さんひとりに育てられ中学進学もままならなかった真鍋先生を引き取り、その後の教育を支え、更に笈を負うて上京後、貧窮をみかねて旧西条藩主松平家の援助を請い、七円の奨学金を得られた。やがて郷里西条中学に赴任した恩師である金子先生は病に倒れ、真鍋先生の手厚い治療の甲斐無く亡

くなられた。その葬儀のあと、真鍋先生は金五千円也を差しだし金子先生の思い出にと奨学金「金子賞」を設けられ、これが現在も続いている。むしろ「真鍋賞」というべきであろうか」と述べておられる。市内橋の木神社の境内に真鍋先生の生家が復元されている。今年、西条市医師会では地域保健医療カードシステムのパイロット事業や病院・診療所連携推進モデル事業の指定を受け、新しい医療の在り方を県下に先駆けて検討することになった。医師会館を訪れる度に三先生の暖かいレリーフ像を拝し、新しいものへ挑戦された業績を思い、後輩として大いに勇気づけられている。

今回は、新居浜市でモダンバレを主宰され、また、詩人としても高名な芝千恵子さんをお願い致します。



た種は今も成長を続け

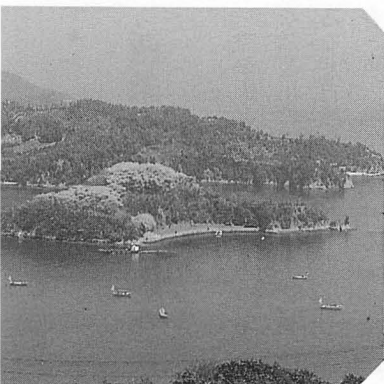
な

な

400年前の 水軍ロマンを追う

宮窪町

水軍ふるさと会



今治市の北東海上約4kmに位置する大島の北東半面を占める宮窪町。町の中心部から北方海上1kmのところにある能島は、かつての村上水軍の根拠地であり、国指定の史跡となっている。そんな「能島水軍ロマンの里」宮窪に、四〇〇年も前の水軍の歴史に思いを馳せながら、地域づくりに一役買っている「水軍ふるさと会」がある。今回、その水軍ふるさと会会長



会長 矢野 久志氏

の矢野久志さんと同会会員で宮窪町生活文化課長の村上利雄さんのお二人にお会いし、水軍ロマンへの想い入れや将来の夢などについてお話を伺いました。

◇「NHK大河ドラマを呼ぶ会」発足

「石の町・宮窪」のシンボリック建築物として造られている石文化伝承館で、矢野会長さんと村上さんのお二人に、水軍への果てしなき想いをお尋ねした。

昭和六二年六月一〇日、業種の異なる会員一〇名で、水軍ふるさと会は発足した。(現在は八名)「むらおこし」という大それた考えではなく、ゆとりの中から生まれた「地域を思う会」といったところだった。

地元特産品の即売やイベント、数々の勉強会等に取り組んだが、

昭和六三年、水軍ふるさと会が呼び掛けて、三島五町のむらおこしグループと商工会青年部が中心となって「NHK大河ドラマを呼ぶ会」が発足した。能島を根拠地に瀬戸内海で活躍した村上水軍の総大将村上武吉をモデルにした小説『秀吉と武吉』（城山三郎著）という原作もあり、NHKの大河ドラマに取り上げてもらえれば、地域の活性化につながるだろうと考え、活動資金集めのための映画会の開催や一五、〇〇〇枚もの署名はがきを集めるなど様々な活動を展開していった。

「残念ながら、諸般の事情により大河ドラマを呼ぶことは断念せざるを得なかった。でも、この一連の活動を通して、町内、県内はもとより、県外の数多くの人たちと知り会えたことが何よりの財産だと思うとるんよ」と矢野会長は笑顔で振り返る。能島水軍への想い入れは誰にも負けないという村上さんは、「大河ドラマを呼ぶ会の活動をしながら、水軍に関する学習会等をこなしていくうちに、

『水軍和船競争』に迫り着いた。今は、これに入れ込んでますよ。今まで全国で、海のイベントで失敗したものはないんですよ」と自信たっぷり。

やはり、地域おこしの仕掛け人たちが元氣いっぱいでない周囲は元氣にならないようだ。



◇第五回国民文化祭

「海フェスティバル」の開催前述の活動に加え、四〇〇年ぶりに「水軍弓の遠的試し打ち」を復活させたのを記念して、水軍が戦闘で重んじた弓術の根拠地能島で「弓の遠的大会」を開催するなど様々な活動を実践する中、平成二年度には、第五回国民文化祭が愛媛県で開催されることになり、越智郡島しょ部三島五町では「海のフェスティバル」が行われることになった。

そこで「和船競争を行おう。村上水軍を全国にPRするチャンスだ」ということで、水軍早船二隻を建造するよう町にお願いした。

長崎のペーロンや沖繩のハーレーなど、全国的にも有名な地域からも参加していただき、町内各種団体の協力を得て「水軍パレード」等を実施、往時の村上水軍さんからの勇壮なパレードと大変好評を得たという。「うちの水軍レースは、他にはない、うちにしかできないイベントだと思っています。」

そして、実際に現地（長崎）でペーロン競争を見たことはないけれど、ペーロン競争に追いつけ、追い越せという気持ちで水軍レースに取り組んでいます。櫓を漕ぐ者も丘で応援する者も、一体となって楽しめるイベントにしたいと思っています」と穏やかな口調の中にも、熱い想い入れに溢れている矢野会長さん。

◇能島水軍小早船「いざ出陣！」

平成三年八月、「第一回能島水軍レース」が開催され、地元から一五チーム総勢一六〇余名の参加



があった。櫓は全部で五丁あり、一丁の櫓を二人が漕ぐ。それに太鼓叩きが一名と、合計一名が一隻の小早船に乗る。チームワークとパワーがモノをいうレース。「まさに、男の戦いそのものという感じなんよ」と誇らしげに、しかも、楽しそうに語る村上副会長。

翌年の第二回水軍レースには、上浦町、伯方町、弓削町、愛大ボート部等から、女性だけのチーム二チームを含む合計二六チームの参

加があり、盛大に、勇壮なレースが展開された。地元町長さんや議長さん方が鎧を着て入場行進をしたり、レースの模様を実況中継するなど、大会はいやが上にも盛り上がったという。

そして、三回目の今年は、伯方町、吉海町も小早船を建造することになり、三町共同で「水軍レース」を開催することになった。日本一の水軍レースへ向かって、一歩一歩ではあるが着実に進んでいるようである。

◇今後の取組みとして……

平成一〇年には瀬戸内海大橋（今治―尾道ルート）の全通が見込まれる今、文字通り三島五町が一体となつての動きが求められてくるであろう。将来的には、三島五町で共同開催し、全国から出場チームを募り、前夜祭等の歓迎イベント等を行い、瀬戸内の一大夏祭りとなるようにしていきたいという。

また、ふるさと会の新しい動きとしては、平成五年一〇月二・三日の両日に、大分県玖珠町から来

島水軍の子孫たち一〇〇名余りが宮窪町を訪れ、ふるさと会と水軍交流会をすることとなっている。さらに、ゆくゆくは和船レース大会（ペーロン競争）の先輩である長崎との交流も考えているとのことである。

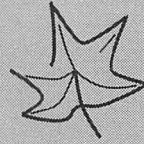
自分たちの町の今と未来をその町の歴史を通して、真剣に考える。こんな当たり前で且つ忘れそうなことを、改めて教えられた気がします。

今年の水軍レースは、七月一日の日曜日に宮窪町において開催されます。みなさん、一度訪ねられて、水軍ロマンを体感してみてください。

（取材／研究員 藤原 元久）

元気印
レポート

夢はもみじの 里づくり



平成おもご塾

塾長 中川 直彦



県都松山市
から、南西へ
七〇km、西日
本最高峰石鎚
山のふもとに
位置し、風光明媚な面河溪谷と四
国で唯一の山岳有料道路「石鎚ス
カイライン」を有し、年間四〇万
人の観光客が訪れる村、それが私
たちの愛する面河村です。

しかし、村の現状は、基幹産業
である林業は不振であり、年々人
口も減少している。現在では、千
二百人余りの典型的な過疎の山村
であり、一五歳―六四歳までの生
産年齢人口五七%、六五歳以上の
老年人口三〇%という人口構成と
なっております。

年々、若者が減少していくとい
う危機感の中、これまで県内外の
著名な講師をお招きし、村づくり
や地域おこしなどを題材とした講
演会、勉強会といったものを幾度
となく繰り返し行いました。村民の意
識が少しずつ、現状打開の必要性
を感じ始めていた頃、平成二年度
に県の事業による生活文化若者塾
を導入することが決まりました。

半ば強制的に塾生として集められ
与えられた課題を何とかこなして
いったという程度で、その事業は
終了したのでした。

ところが、自然消滅かと思われ
ていたこの若者塾が、誰が言い出
した訳でもなく、もう少し続けて
みたいという空気になり始めた
のです。そこで、塾名もこれまで
の「ふるさと創生若者塾」から、
平成の時代に相応しく「平成おも
ご塾」と改名し、平成三年度から
毎月第一火曜日を定例会とする
という事業計画だけで、再スタート
する事となりました。

役場の職員を中心としながらも、
郵便局、農業、林業、自営業と職



種の異なる非常に個性的なメン
バー構成となつていたため、議論
の中では厳しいものがありますが、
結果的には良くまとまっていると
いう非常に不思議な塾生たちです。
村に残った数少ない若者たちが、
月に一回集まって、肩肘張らない、
気楽な会合があつてもいいじゃな
いかという気持ちと、世代を同じ
くする仲間たちの夢や、自分たち
が理想とする村づくりなどを話し
合つていく場所が持てれば良いと
いうことだけで始めました。

会を進める中で最初に手掛けた
のが、地域のすべての情報を集め
た便利マップの作成でした。グル
メ、ロード、レジャー、観光、名
所等について、それぞれ班編成を
行ない、それぞれの専門分野にお
ける内容の見直しと校正作業を繰
り返し、ようやく製本化の段階ま
でこぎつけました。たった一冊の
マップを作る事が、いかに大変な
作業であるかという事を、塾生一
人ひとりが再認識し、一つのこと
を達成することの大変さを改めて
痛感しました。



そうした一連の塾活動を行つて
きましたが、なかなか目標となる
計画も立てられず、何か取り組め
ることはないかと模索状態が続い
ていた時、愛媛県まちづくり総合
センターの協力で、ふるさとコン
サルティング事業を実施すること
となり、活動の糸口とするべく「自
ら考え、自ら行う」塾活動を目指
すこととしました。

講師には県外より高知県大川村
の朝倉慧さん、県内からは中島町
の大崎巖さんをお招きし、村内一
円を視察頂いた後、研究討議に入
りましたが、講師からは「観光の
面を見ても、従来の美しい自然だ
けに頼ってい

ては、観光客
の増大は難し
いだろう。面
白い産業があ
るとか美味し
い料理が食べ
られるとか、
ユニークなイ
ベントが開催
されるところ

には必ず人が集まる。つまり生活文化の高いところに人は集まる。生活文化を高める「むらづくり」をしているところが、これからの観光地の条件になるんだ」ということを教えていただきました。

そこで、思いつきや目先の事だけに捕らわれた活動ではなく、地味であっても『現状分析』↓『課題の発見』↓『方向づけ』↓『コンセプトづくり』↓『行動計画』という確固たるマニュアルを作成し、行動していかなければならないと塾の基本方針を決定しました。そして最終的に、これらの「むらづくり」に取り組む表現方法として、「もみじの里づくり」を自分たちの活動の基本構想に位置付けました。

つまり、面河村の自慢となる「宝」を磨き、これを成長させることが、観光地づくりにつながることであり、将来の目標である百万人の観光客が訪れる観光文化地域を目指して、時間は懸かって、確かな体制づくりに努めていかなければならないと考えました。



そうした目標を定め、平成四年度には、村木であり基本構想案の名前にも冠した、モミジの苗木の採取を塾生全員で行い、現在、六百本余りを村有地の一部を借り受け育成しております。今後は、現存するもみじラインへの移植や、もみじ庭園等に活用する計画であり、何十年後には素晴らしい観光資源になると信じて活動を継続していきたいと思っています。

また、その他の今年度の事業計画としては、次のことを予定しております。

- もみじのしおりづくり
- ゲンゴロウの里づくり（清流にしか生息しないゲンゴロウを、各施設で飼育展示し、美しい自然と水をアピールする）

- 四国の屋根から世界へ飛び立つ——国際人養成の開発教育キャンプ事業（面河村と野村町で年四回実施予定であり、その事業を後援する）

● 面河自然観察会の実施

- 中島町の犬崎さん、大川村の朝倉さんとの懇談会

- （助）愛媛県まちづくり総合センターとの意見交換会、勉強会

- 塾生を中心としたキャンプ、バーベキュー大会

以上の今年度目標に向かって、現在、着々と研究協議を行なっております。地味な活動も多く、楽しさばかりではありませんが、塾生みんなが目指している「もみじの里づくり」即ち、「誇れる地域づくり」のために、一步一步着実に前進して行きたいと思っています。

都市生活でストレスを感じ、リフレッシュしたい、クオリティライフを求めたいという人々を患者と考え、人と自然の織りなすライブステージ面河がドクターで、観光文化を業とする我々をナースだと考えています。患者と医師を取

り持つ我々は、全ての面での「自然と付き合えるインストラクター」の資格を持った人づくりに努めなければなりません。そのためには、交通、産業、経済、文化、自然等の改善と地域に住む人々の価値観やライフスタイルの向上を図っていかねばなりません。

私たち「平成おもご塾」は、「もみじの里づくり構想」を策定し、生涯を「種をまく人」として地域で生き続けたいと考えています。

元気印
レポート



出会いとふれあいの二年間

西条市役所 国田 敦彦

(元研究員)

「まちづくり」など他人事だと思っていた私が、まちづくりセンターに勤務するようになってから

早いもので二年が過ぎました。まちづくりセンターでの二年間は、体験することの全てが新鮮で、これまで経験出来なかったことがこの間に凝縮された思いでした。

この二年間を通じて、「まちづくり」は行政の職員としてのみの仕事ではなく、一住民として考えなければならぬ重要なことであると感ずるようになりました。

そのきっかけは、やはり多くの人々との出会いでした。愛媛県内でも、まちづくりなどと肩肘張らず、自分が生まれ育ったふるさとを愛しているが故に、このふるさとを、いかに未来に残し、子供たちに伝えていくかということを実

剣に考えている多くの人たちに会いました。

歴史的町並みを保存するために、自らを投げ打って活動されてきた人たち、「まちづくりは感動するところから始まる」という考えからまちづくりグループを結成し、子供たちに感動を与え続けている人たち、ふるさとの川が護岸工事のコンクリートで固められるのを

案じ、住民の力で行政を動かし、より自然に近い護岸へと変更させた人たち等々、それぞれの地域で地域の特色を活かして活動している元気人、感動を与える数多くの素晴らしい人々と出会うことが出来ました。そして、これらの出会いから、自分が生まれ育った「えひめ」への更なる愛着心が生まれました。

また、全国の色々な所でも、ふるさとを愛する多くの人たちに出

会いました。

ひとつのまちづくりを考える重要な契機となったのは、センターが実施している「地域づくり交流研修」でした。

その時、岐阜県蛭川村でお会いした石の博物館を私費で建てた方からは、「まちづくりは自分の喜びづくりであり、そのために熱くなれ」ということを教えていただきました。まちづくり・地域づくりを長く続けていくためには、やはり、自分がまず楽しむことが大事であるということは、他の実践者からもお聞きしました。

「日本大正村」を宣言した明智町というところでは、まちづくりにおけるボランティアの大切さを学びました。お年寄りの方々がボランティアでまちを案内したり、まちを美しくしている姿を見て、子供たちも定期的にゴミを拾ったり、清掃したりするようになったそうです。「まちづくりは人づくり」とよく言われますが、ここである方からお聞きした「まちづくりは人を育てる環境づくりだ」と

言うことを実感しました。

他にも、過疎とか豪雪という逆境を逆手に取り、地域の資源を活かし、自らのアイデアで多くの人々との交流を深め、地域を元氣付かせている人々にも出会いました。

今、人々の考えが「ものの豊かさ」から「こころの豊かさ」へと変化している中、私たちも人々とのふれあいを大切にしていかなければならぬと感じた多くの出会いです。

終わりに、新潟県のある町でのお話を伺った中に「迷惑を掛けない」ということは、人と人との関係であり、迷惑は大いに掛け合うべきだ」と言うお話がありました。この二年間で広げたネットワークを大切に、これからも色々な面で迷惑を掛け合っていきたいと思っています。



県内初の 地域福祉センター 完成

大三島町

去る
四月三
〇日に、
町民の
健康と
福祉の
拠点施
設の整
備事業

としては県内初である「大三島町地域福祉センターふれあい苑」の落成を祝う記念式典が行われました。

この施設は、県下で二番目に高齢化の進んでいる本町の地域ニ



ズに添った健康と福祉の拠点施設として、町が国・県の補助により設置をしたもので、敷地面積五、八八七㎡、鉄筋コンクリート平屋建二三〇㎡の建物規模となっております。

当センターで行う業務内容は、虚弱や寝たきりの高齢者・障害者を対象としたデイサービスをはじめ、健康と福祉に関する相談や研修、生きがいづくりのための教養娯楽、軽スポーツや創作活動など幅広く計画しております。

また、保健福祉の行政サービスと、利用対象者を結びつけるための在宅介護支援センターを併設すると共に、各分野の専門職員を配置し、健康福祉施策の向上を期しています。

肱川町福祉ゾーン 完成

肱川町

福祉ゾーン内には、二・三歳児を対象とした保育所「ぽつぽ園」、デイサービスメインとした

「この町に生まれ育ってきて良かった」町民の皆さんがこんな言葉を交されるまちづくりを進めたい。そんな思いから、肱川町では三世代が同じ敷地内で交流を深めながら、楽しく、和やかに、そして元気に暮らすことができるための福祉ゾーンの整備を進めていましたが、三月末、道野尾地区の肱川沿いに完成しました。



高齢者生活福祉センター「肱流苑」、さらに町営住宅が配置されています。既に町営住宅には若い世代の人たちが入居し、子供たちの歓声が緑豊かな谷あいにこだましています。

六月一日に

は、「ぽつぽ園」と「肱流苑」がオープ

ンしました。

ゾーン内は園児たちの歓声が飛び交い、お年寄りのにややかな笑顔がこぼれ、仲むつまじい新婚さん、そして乳母車を押す若い母親の姿がここにあります。





工芸文化の里を目指し 「農村工芸体験館」完成

広田村

緑と清流と芸術を満喫できるリフレッシュ・タウンを目指す村に、農村工芸体験館が完成オープンしました。

この施設は、農村の自然や伝統文化等を都市部の人々に体験していただくとともに、一流の芸術家の作品や村の特産品等の展示を目的に建設されました。独創的な二角形の木造二階建て、一階に体験学習室二室のほか事務室、ロビー等、二階部分はギャラリーとなっています。

体験学習室では、木工教室、陶芸教室等が開催でき、ギャラリーには、長さ四五メートルの絵画の（一枚物）ほか、有名画家の作品、漆工芸品、世界の土鈴三五〇点、有名鍛冶土作の刃物、広田焼、村



内景勝地の写真等が展示されています。

将来は、農村工芸体験館一帯を「神の森公園」として整備し、芸術作品の作家や、専門知識と技術を備えた指導者の招聘を図り、見るだけでなく、手に触れ体験できる工芸文化の里づくりにより都市と農村の交流と観光による活性化を目指しています。

是非ご家族お揃いで心身のリフレッシュにお越し下さい。

平成二年度から交流拠点施設として整備中のクラフトの里に、四国で初めてのそば打ち体験施設「そば道場」が完成し、五月三〇日オープンしました。

この施設は、新たな特産品として、平成元年度より栽培奨励しておりました「そば」を活用し、都市住民の「参加、体験する」余暇需要を満たしながら、都市との交流を図って行くことをねらいとしています。

クラフトの里に 四国初のそば道場 オープン

中山町



そばを打つことが出来ますし、打った麺を湯がき、食べることも出来るシステムになっております。

体験料（入門料）は、一人二千元。この金額は、六人前のそばを打つことになりま

すので決して高い料金かと思ひます。なお、そば打ちの指導は、福井県や福島県のそば屋さんで

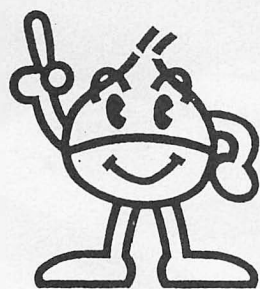
研修した指導員や地域のご婦人方が行いますから、初めての方も気軽に楽しく体験することが出来ますので、皆様ぜひ「そば道場」にお越しください。

問い合わせ先

道場
では、
一度に
六〇人
ほどが

クラフトの里「そば道場」

☎〇八九九（六八）〇七五六



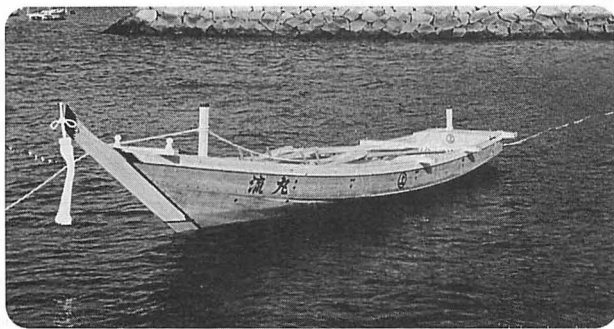
**craft
no sato**
NAKAYAMA-CHO

村上水軍小早船 「流丸」復元！

伯方町

この度、伯方町で建造した「流丸」は、村上水軍の小早船を復元したものです。今夏、宮窪町で行われる水軍レースに出場するのが主な目的ですが、中高生に活用してもらって、櫓の漕法を伝承したいという狙いも持っています。

「流丸」は全長一〇・八メートル、幅二・一メートル、五丁櫓で漕ぐようになっており、この快速の小型舟艇は、村上水軍の決戦兵器だったのです。村上水軍はこの小早船の集団突撃によって、名実ともに海賊大將軍として瀬戸内海に君臨したのだそうです。



船名の「流丸」は、伯方町在住の作家原田八束氏の小説『虹と落日』に登場する、村上水軍の旗艦の名から取りました。この『虹と落日』は、村上水軍の栄光と挫折を描いた海洋歴史小説で、伯方町が海洋文化拠点づくりの一環として上梓したものです。村上水軍がどのように小早船を運用したかは、是非『虹と落日』をご一読下さい。同書購読ご希望の方は、伯方町中央公民館（〇八九七―七二一―五〇〇）まで。



吉田町ふれあい運動公園
～ふれあい健康センター
室内温水プール～
5月22日 オープンしました
吉田町

す。 ■ふれあい健康センター
午前九時から午後一時
一〇時

ふれあい健康センターは、バレーボールコート三面がとれるアリーナ（四六m×三五m）、多種多様な運動機器を配したトレーニング室、柔道と剣道の格技室、会議・講習、卓球もできる多目的室、シャワー室のある更衣室等広々とした空間と快適性を備えた施設です。また、同時に室内温水プール（二五m七コース・幼児用プール）もオープンし、健康づくりとコミュニティを推進する施設整備が整いました。

■室内温水プール

七～八月は午前一〇時から午後八時

八時

その他の月は午後一時から午後八時

八時

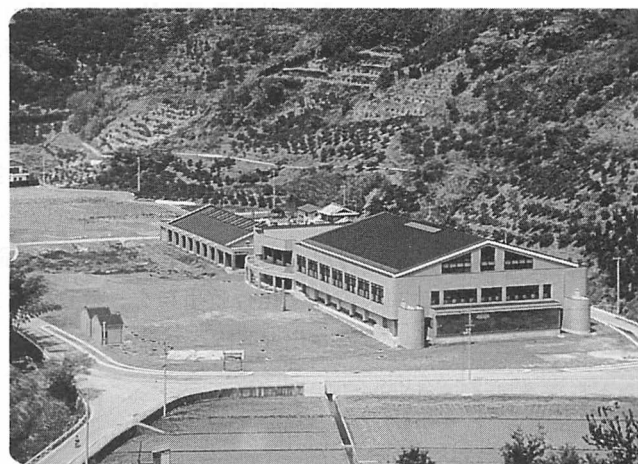
なお、どちらの施設も有料です。

☆休日

毎週月曜日、祝祭日の翌日

*詳しくは、吉田町文化体育振興協会まで

☎〇八九五（五二）四一五五



改正内容	担当事務等
国際交流課の移管並びに「地方拠点都市係」及び「架橋記念事業係」の設置	地域レベルの国際化の進展による事業の増加に対処し、これらを総合調整し、計画的、効率的に展開するため、国際交流課を知事公室から企画調整部に移管しました。 また、南予地域の振興を図る地方拠点都市地域整備事務及び瀬戸内海大橋完成に向けた架橋記念事業を積極的に推進するため、企画調整部政策調整課にそれぞれの事務を専担する「地方拠点都市係」及び「架橋記念事業係」を設置しました。
主要プロジェクトの設置	県政の重要課題に積極的に取り組むため、次の3つの「プロジェクト」を設置しました。 ○老人保健福祉計画推進班【保健環境部に設置】 ○F A Z（国際産業交流拠点：フォーリン・アクセス・ゾーン）整備推進班【商工労働部に設置】 ○地域高規格道路事業推進班【土木部に設置】
《その他の組織改正》 (1) 水産局「全国豊かな海づくり大会準備室」を「全国豊かな海づくり大会室」に改称 (2) 「公害技術センター」を「環境保全センター」に改称 (3) 「農業機械研修センター」を農業大学校に統合し、同校に「研修課」を設置 (4) 高等職業訓練校及び専修職業訓練校を「高等技術専門校」に改称 (5) 「富郷発電建設事務所」を公営企業管理局に設置 (6) 「新松山空港道路建設課」を松山地方局建設部に設置 (7) 松山地方局久万土木事務所工務課を「第一工務課」と「第二工務課」に分割 (8) 地方局総務福祉部「県民生活課企画広報係」を総務調整課へ移管及び同部「総務調整課交通消防係」を県民生活課へ移管 (9) 今治小松自動車道の用地買収を専担する「用地第二係」を西条地方局丹原土木事務所用地管理課に設置 (10) 芸術文化行政事務を、教育委員会事務局文化財保護課から生活文化総室文化振興課へ移管	

愛媛県から 組織改正のお知らせ

愛媛県は、第2期生活文化県政の3年目にあたる平成5年度において、時代の変化に弾力的に即応できる庁内体制の整備を図るため、4月1日付けの組織改正を行いました。

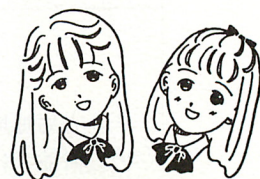
主なものは、次のとおりです。

改正内容	担当事務等
「県民情報室」の設置	平成6年1月からの情報公開制度の試行を円滑に実施し、開かれた県政を推進するため、情報公開の総合窓口として「県民情報室」を総務部に設置しました。
「自然環境対策課」の設置	自然保護、自然公園及び鳥獣保護の事務を一体的に行い、併せて資源リサイクルや廃棄物対策の事務も所掌する「自然環境対策課」を保健環境部に設置しました。
「農協指導室」の設置	県内13農協構想の早期実現を支援するとともに、全県的な視野と統一的な基準に基づいた検査体制を確立するため「農協指導室」を農林水産部に設置しました。
「地方局地域福祉課」の設置並びに同課「高齢者福祉係」及び「障害福祉係」の設置	生活保護から在宅福祉・地域福祉への福祉ニーズの変化及び県から町村への措置権委譲に対処し、地方における高齢者福祉及び障害福祉対策を強化するため、次の改正を行いました。 ○地方局「保護課」及び「福祉課」を統合し「地域福祉課」を設置 ○地域福祉課に「高齢者福祉係」及び「障害福祉係」を設置

地域づくりビデオ貸出しのご案内

(財)愛媛県まちづくり総合センターでは、「地域づくりビデオ」を用意し、無料で貸出しをしております。今回下表のビデオが新規に揃いました。既存のビデオと併せ各種内容のものが揃っておりますので、ご利用下さい。

No	タイトル	内 容 (製作年月)	時間 (分)
①	シルバーパワーによるまちづくり	これから本格的な高齢化社会を迎えるにあたって、全国各地で様々な取組み・動きがある。その中でも特に「老人・高齢者が生き生きしているまちづくり」を目指している地域の表情を広島県豊平町「私立農業小学校」の老人と子供たちの交流、新潟県大和町「よもぎの会」と埼玉県荒川村「つくしの会」の演劇活動を通じて映像化する。(H5. 3)	30
②	まちおこし会社	まちづくりの実行主体は行政のみとは限らない。今、住民のための住民による、或いは住民が仕掛人の地域活性化のため組織＝まちおこし会社が様々な活動を各地で展開している。そこで福井県名田庄村の「(株)名田庄商会」(第3セクター)と長野県小川村「(株)小川の庄」の独特な活動を通じてその実態、背景、住民・行政との係わり、苦心・苦勞、将来を探ってみる。(H5. 3)	33



センターに初出勤したのは、ついこの間だと思っていたのに世間はもう初夏になっていました。新しい職場に入った方も、そろそろ自分の仕事に慣れた頃でしょうか？

降り続く雨に負けないように、元気に夏を迎えましょう。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係

二人のMs・(白石・川原)まで
〒七九〇 松山市三番町八丁目

二三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 〇八九九(三三)七七五〇

FAX 〇八九九(三三)七七六〇

発行・平成五年六月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議